# のりづきさん

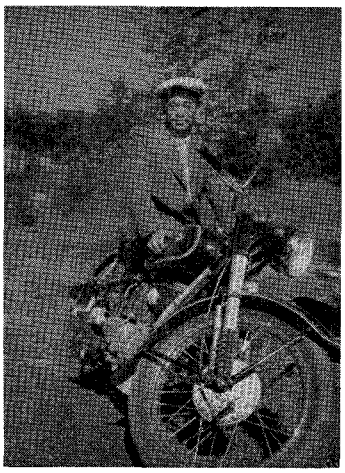
田　中　春　夫*

「学者道楽」という言葉がある．一生懸命でかせいでお金がたまると，何かひとのためになることをしてから天命を全うしたいと思う人が多いらしく，特定の学者に金を出す．これが財界人の究極の道楽だという．ところがここに，全く型破りの学者道楽をしているひとがいる．その名は法月惣次郎．静岡県焼津市に住む．従業員が数十名の鉄工所の社長．といってもまことに風采の上らない鉄工場のオヤジさんである．別にお金が余っているわけでもなく，学者にお金を出そうというわけでもない．ただ何となく学問にあこがれをもっていて，予算の乏しい大学の先生のむりな頼みを「何とかやってみましょう」と引きうけては損をする．工場の従業員がこれを呼んでオヤジさんの学者道楽という．この道楽が，日本の電波天文学の発展の大きな原動力になってきたことは，天文学にとってまことにありがたいことではある．

のりづきさんは根っからの腕ききの職人がある．いわばタタキ上げの親方で，ひとのすることをだまって見ていられないたちである．口下手で，おまけに製缶や熔接に根をつめすぎて耳が少し遠く，目も少しわるく，まことにとりつきにくい人である．

豊川で，日本最初の赤道儀パラボラを計画したのが昭和25年，少い予算でどこか作ってくれるところは，と探しているとき，よしやろう，と引き受けてくれたのが彼であった．彼が豊川稲荷に信仰が厚かったのも何かの因縁と思う．当時こちらも天文学にはズブのしろうと，お恥しい話だが，あやうく設計を間違えかけたりして冷や汗をかいたが，翌年の初めに 2.5m のパラボラが立派にでき上ってきたのを見たとき，何とこれが大きく見えたことか．このときからのりづきさんの腕と人柄にほれ込み，以来20年間，彼と共にタタキにタタキ，パラボラ100個を作り上げて，今日の豊川電波天文台がわずか数千万円の予算で築き上げられたのである．

いつの日か，のりづきさんに頼めば安くできるという噂が電波天文学者の間に広まった．そこで紹介を頼まれる．一緒にタタク覚悟ならと，彼を推せんする．このようにして，平磯の 10m パラボラ，野辺山の 160MHz 干渉計パラボラ，名古屋の8ミリ干渉計パラボラなどが彼の手にかかった．最近のヒットは，三鷹の 6m ミリ波パラボラの架台であろう．あそこには口のうまい人がいて，難しい注文を沢山つけては値切りに値切って，はたから見ていてハラハラしたが，とうとう立派に作り上げ，その腕のたしかさを改めて立証した．あとで会うたびに，あれは損したとこぼしてはいるが．



かくて日本の電波天文用のパラボラの大部分はのりづきさんの手にかかったが，いままた京大の赤外線用1mパラボラを手がけようとしている．面を10ミクロン以内に荒仕上げをし，架台もミリ波アンテナよりも更にきびしい精度がいるというしろものである．鉄工場でミクロンは無理だから，もっと精度を値切れという私の忠告を無視して，断然やってみるという．私もついにかぶとを脱いだ．ただ願わくは頼んだ先生方よ，最後には一緒になってタタいて下さらんことを．

のりづきさんのところでは，弟さんも息子さんも一緒に働らいている．近頃では珍らしいことである．もうそろそろ，と思うけれども，まだまだ負けぬ気である．自宅の建て増しをしたり，船を作ったりもする．まことに器用なものだと改めて感心させられる．釣りが好きなのである．船はアルミの袋張りで，自動車の中古エンジンをつけ，5人で釣りが楽しめるという．それというのも釣った「かつお」や「太刀魚」のさしみで一ぱいというのが彼の至上の楽しみの一つ．いい酒である．

彼のもう一つの趣味はスピード狂，写真は今から17年前の昭和29年のもの．当時からすでにごらんの通り．その後四つ輪になってから，ぶつかったり川に落ちたり，数々の武勇伝が残っているが，不思議と自分でもけがをしないし，他人をきずつけたこともない．日本にハイウェーができたことを誰よりも喜んでいる一人であろう．いまの彼を知っている方は，この写真を見て，彼がとしをとらないのに驚かれると思う．これからも日本の天文学のために彼の健闘を祈って止まない．

* 名大空電研